
 事例報告

話題提供者を主役にするカンファレンスの試み

— 1 事例の報告 —

村山正治*・姜 潤華*・松尾理佳*・別府絢*・安永有希*

I. 目的

ケースカンファレンスの新しい在り方について日本心理臨床学会でも検討が始まっている。村山は、「事例検討の再検討」の招待シンポで「今なぜ PCAGIP か」(2020, 11, 01) を発表し、好評であった。本専攻でもカンファレンスの発表者が容易に決まらず、その在り方を模索中である。新しいカンファレンスの在り方のひとつ

が PCAGIP であるが、今回は PCAGIP でなく、新しい在り方を実践した 90 分の新しいカンファセッションの一例を報告する。

II. 新しいカンファレンスの形態

1. カンファレンスの在り方を話題提供者が決定する。
2. カンファレンス発表者のテーマ公開から発表までの事前過程

⑩10月25日 話題提供者の松尾が専攻メールにてテーマを公表する(従来方式)

【テーマ：『共感』 共感できない相手とどう向き合うか】

担当教員：村山、姜

司 会：姜

記 録 者：安永

発表形式：グループ

場所：授業教室

私自身ケースの中や実践現場で、クライアントのありのままを受け止めることの難しさを感じることが多くありました。実践現場などでの事例をあげながら、皆さんの意見を聞いてみたいと思っています。

⑪10月26日 カンファレンス担当教員の1人、村山がこれを読み松尾に3ステップモデルの新しいカンファレンスを提案する。

第一体験

ステップ I 松尾が事例 I について共感できない相手にどう感じている、あるいはどう感じていたのか自分の気持ちを表現してみる

ステップ II それをきいた参加者全員が、松尾の感じをうけてどんなふう感じたかを各自書いてみる

黒板に同時並行で書く

ステップ III ステップ II を読んで 松尾の感想を述べる

姜・村山が感想を述べる

第2体験 実践現場の共感しにくい体験をのべる

1-3 ステップ実施

まとめ 姜・村山の感想・まとめ

* 東亜大学大学院 総合学術研究科

- ③10月26日 松尾からの返信、姜からの返信
- ④10月26日 村山が最終案を提案
- ⑤10月27日 松尾と村山が13時から30分協議し、当日の発表の形の最終案を協議、決定した。

III. 事前協議を数回持つことの重要性

1. 従来の本専攻のカンファレンスは前日までに発表者が事例を担当教員に送付してくる。それを読んで担当教員は当日コメントするという手順を踏んできた。この考えの前提はカンファレンスは ①事例発表をし、②当日の担当教員が指導をするというパターンである。
2. この従来パターンのカンファ授業については、話題提供者の心理的安全性が十分に確保されないことが時々起こり、話題提供者の心理的成長につながらないことがある。院生たちは時に発表を敬遠して、自分の安全を確保することが起こることもある。
3. 村山は、話題提供者と事前に話し合い、話題提供者の事例提供目的を話し合うことで、話題提供者がカンファレンスの主役であることを明確にしようと試みている。今回は松尾の勇気ある挑戦として「テーマ自体がかなり明確に話題提供の目的を明示されていた」ので、10月25日から発表の当日まで事前手順を踏んで話題提供者の目的、発表形式、意向をくみ取ることに努めた。ポイントは、松尾が用意した事例資料を配布しないことにしたことである。従来事例検討と混同しないことに留意した。結果として、IVの構造が生まれた。(村山執筆)

IV. 新しい試みのカンファレンスのプロセス

1. 構造

ファシリテーター：村山正治 姜潤華
 話題提供者：松尾理佳

記録者：別府絢 安永有希

参加者：福田真大 西山幸歩 田中孝尚
 中山美枝子 沖本真理 古谷浩
 西岡範明 金村君恵

2. プロセス

①松尾の話題提供

テーマ：「共感」共感できない相手とどう向き合うのか

日頃のケースカンファレンスとは違い、ケースの内容というよりも、私自身がケースや実践現場で目の前にいるクライアントに共感できない、理解できない、苦しいということがあった。

現在持っているケースで、1回目にクライアントの話す内容に圧倒された。コロナ禍で3ヶ月センターが閉まっている間にクライアントの中で様々なことが起こっていた。終わった後、頭の中にずっと苦しい感情が渦巻いた。これではいけないと思い、先生に相談し、アドバイジングを受けた。

カウンセリングとはどうしたらいいのだろうかという戸惑いと同時に、「共感」とは何なんだろう、相手を理解するために相手とどう向き合えばいいのだろうかと悩み、クライアントのありのままを受け止めることの難しさを感じることも多くあった。その中で事例もあげながら、皆さんが実践現場やケースなどでクライアントとどう向き合っているのか、意見を聞いてみたいと思い、今回このようなテーマを選んだ。

②姜ファシリテーションにより参加メンバーが松尾の発言から受けた各自の感想

※セッション中はホワイトボードへ記録者が記録をしていったが、今回はその板書したものを下記に載せる。

- A：Aくんはただ聞いてほしいだけかな？と思うときにただ聞くだけでいいのかな
- B：返す言葉が無い→教えてもらう
 Cl⇔Thの立ち位置を変える
 声掛けで話が変わる
- C：相手の求めている事に答えられているかはわからない

相手をわかろうとする姿勢

- D：相手の気持ち→オウム返し
相手の行動→肯定も否定もしない
「～じゃないのかな」と声を掛ける
- E：「～じゃないですか」
→そうじゃないときの反応に困る（共感）
- F：どんな言葉を使っていいのか分からない時がある
→経験をつむ
- G：共感を考えてなくて、
「どうやったら会えるのか」「どんな話をしようか」とフロムライヒマン→治そうと思わず一緒に過ごすだけなど連想した
- H：そもそも共感とは？
面接概要 相手の人の主張を
- I：自分の心で消化できない事は当然のことだと思っていいいのでは？
CIだけでなく周りも気になる
- J：「こういう人なんだな」と思う時、
自分はその人を受け入れ難いのだと考える。
返せない自分ではなく返さない自分。
相手にとっての自分の存在を考える
→何故この人に違和感を感じるのかを考えるとその人が見えてくる
- K：共感できるところだけに目を向けていた
→共感できないところにも目を向けていきたい
- L：「共感」しないとイケないはもう「共感」ではない
→関係性づくりから
- ③参加者の感想（記録作成：安永・別府）
- C：この初めての取り組みをやってみようと思ってくれた松尾さんのその気持ちがすごく嬉しかったし、ここに集まってくれた皆さんも「どんなんかな？」と興味をもってくださったりとか。まず、松尾さんの話を聴こうっていう参加された皆さんのその姿勢みたいところ自体がすごく共感的というか。さっきどなたかおしゃってましたけど、共感って態度っていうところで、相手の話を相手の思い通りに理解できたかど

うか別にしても、「聴かせて」てもらおうような、そういった姿勢や態度がすごく良かったなあと。あとなんか、この日差しですね。この時間いつも思うんですけど、この教室のこの感じ。秋のこの感じがすごくいいなと思って（笑）。風の感じとか。あと紅葉の感じとかが、すごく贅沢な時間だなんていう。そんな感じを感じていません。分かったか分からないか分からないんですけど、分かろうとするみたいな試みがすごい嬉しいなっていう。そんな感じなんなんです。はい、ありがとうございます。

- F：私もなんかあの今日ね、ほんとは帰ろかなって。以前は以前はですよ、先週は来てないんで思ってたんですけど、メールを見たときに松尾さんのあのなんか感じ方が、やっぱりあの自分で聴いてみたいなのというのが一番ありました。西岡さんの話を聴いてると自分の現役時代もいろんなことを思い出す。人に支持されるとかされないとか全然構わずにその子のことについて六年間ずっと。一人の子どもを見てきた時代なんですよね。だから時間っていうのはいつも必要だなって自分が納得する。相手に批判したことはないので、批判されることずいぶんあったんですけど。最終的には必ず認めてもらえる、もらえないに関係なくその子の成長を見届けてその子が成長したなっていう実感を持ちました。未だにお付き合いがあるんですけど、その子を見てるとよかったなって思うことです。だから、今日いろんな話を聴いてて人の思ってることってチャンスがあれば絶対に出かけていたりそこで経験してくることってすごく大事で、今日来てよかったなって思いました。ありがとうございます。

- B：はい。実は私も今年度初めてカンファに出させていただいて、今日村山先生が係でしたので科目履修生の立ち位置なんですけども、ちょっと出させてもらって良かったと思います。六年前のほんとに自分が心理を学びはじめた頃にタイムスリップするよう

な、自分もその頃にいろんなことを感じていたことをとても呼び起こすというかそういう再体験をさせていただいてとても良かったなあと思いました。ありがとうございました。

E：松尾さん今日はありがとうございます。松尾さんがクライアントさんとそうやって向き合うなかで、松尾さんは凝り固まってる自分の考えっていうけど、自分に気づけるっていうのがやっぱりすごい良いことだなっていうふうに自分は思ってる。やっぱり共感って難しい。でも共感しない、どうしてもまだ自分も初心者だから分かってあげなきゃいけないみたいな思うことはすごいあるけど、やっぱり理解できないこと共感できないことはできないことだけど、自分も確かに思い返したらこういう考え持ってたから言うこと言っちゃったっていうか思ったんだらうなって反省する時間にもなったし。正解とかちょっとまだ私は分からないんですけど、松尾さんが今回こうやってお話をしてくれただけからこそ考えられるし、それってケースカンファだったらそのケースの中でのやりとりだけになっちゃうけど、こうやっていろんなところで皆さんの意見とか松尾さんのまたやってるいろんなケースの話を聴いて勉強になったので、私はすごいこのカンファレンスの形が良かったなっていう感想です。すみません、以上です。

A：今日はありがとうございました。自分もここまで共感について考えてなかったのを改めて共感っていうテーマで皆さんの意見とか体験を聴いて自分も振り返ることができたのでほんと良い時間だったなって思いました。ありがとうございました。

L：はい。今日はありがとうございました。えーっと、僕はその、フォーカシングのあだこうだ言ってますけど、たぶん、感じたことを伝えられなかったことの方が多いです。実は。言っているのか悪いのかわからないですけど、話がどんどん展開していっ

ちゃうとまあ、ここで言っているのかな、話をしているから聞こうって。あ、あれ言えばよかったな、違ったかもしれないな、っていうのは結構あるので、たぶんあって当然だと思います。そのうち、やっぱり落ち込むっていうのはあります。終わってからそういう風には感じますよね。それはやっぱりどうしても、100%完璧なカウンセリングってないと思うんで、できなくて当たり前と思うことの方が大切なのかなと感じます。以上です。

J：今日はありがとうございました。はじめての取り組みですが、こういうカンファいいなあと思いました。1つのケースを延々とこう聞いてあだこうだじゃなくてこれはこれですごく参加した方の、参加度がとてもいろいろ思うものがあるって、私も、なんでカウンセリングなんかやっかいなこと仕事にしてるんだらうって思ったりすることもあるんですけど、でも上手くいかないクライアントから学ぶことの方が多いですね、なんかそれこそさっきのゼミの続きになるけど、自分を知らするための修業をしているのかなって思う。上手くいくケースっていうのはなんもないんですよ、なんもないっていうか、だけど、なんかこう自分が違和感を感じるとか、なんかずーと残るな、みたいな。やっぱそういうところからすごくこう、学ばされるといって、なんだったんだらうあれは。で、やっぱりそういうときには仲間に聞いてもらったりですね、するんですよ。でまた違うSVの先生とかからも、なんかまたこう、支えてもらったりとか、することによって、すごく心境がまた自分の色合いが変わったりとか、だから逆にいまそういう松尾さんがそういう風なことを感じてらっしゃる場面のことにあっているっていうのはすごくいいことだなあと思いましたので今日は提供していただいてありがとうございました。

K：今日はありがとうございました。えっと、…なんだっけ今日はすごく、なんか先生も仰ってたんですけど、日差しが良い感じで、ちょっと途中でうとうとしちゃったりして、カンファでうとうとすることなんてなかったの、いい雰囲気で落ち着きながら過ごせて考えられたのがすごくよかったですなと思いました。ちょっと話が変るんですけど、最初村山先生が輪をちっちゃくしてみたいなことを仰って、でそれが半信半疑だったんですけど実際輪がちっちゃくなったらすごいなんていうんですかね、落ち着くとか、効果がすごい感じて、こういう場面の設定だけでも変わるんだなっていうのを勉強しました。ありがとうございました。

I：今日はお疲れ様でした。ありがとうございました。コメントを求められると思っていなくてあんまり考えられて無いんですけど、皆さんの話をきいてやっぱりクライアントとの関係作りが大事なんだなと思いました。これは、西岡さんの話を聞いて思ったことなんですけど、やっぱりこう、私がクライアントの人に会う以外もクライアントの人は生活しとるんで、それも踏まえて考えていく必要があるんだなって思いました。以上です。

H：ありがとうございました。皆さんの貴重な体験とかを教えて頂いたりしてすごい勉強になりました。ありがとうございました。

D：皆さんありがとうございました。えっとなんか、今日はなんか心理学っていうよりはなんか、大人の道徳の授業をしているような感じで、でまたその今まで見えてこなかった先生方、先輩方の人間の部分みたいなところを感じることができたので非常に面白かったです。私はまだ、ケースとかが頂けてないので、これからはその自分自身、自分の問題からは逃げる癖があるので、あの、ちゃんと問題があったときには、あの、共有してもらったりとかしてですね、これからケースを頑張りたいなと思

います。ありがとうございました。

G：この業界で何が問題になっているかという、ロジャースのカウンセリングについて教える時の最大の問題点は「共感」「自己一致」「無条件の肯定的関心」を分けるのが実は大問題じゃないか。関係の中で分けられるものか、それがテーマになってきています。これが共感とか考えてやってないんじゃないか。そこから皆さん距離をとっていいんじゃないか。つまり、そこで自分が何を感じているのか、彼女が言ったように共感できるところにだけ目を向けてもいいんじゃないか。あらゆる面に共感しないといけないんだというルール自体が縛るんじゃないか。自分の素直な感情をね。共感できてないなあ、この人わかんないんだよねーがあっていいんじゃないか。場合によってはここわかんないから、ちょっと教えてとかね。ってやってもいいんじゃないか。でもなんとなくカウンセラーはそういうのやったらいけんっていうね、ロジャースの考え方の問題点だと僕は思っています。それでカウンセラーの生の感じを縛ってしまい実際に感じていることが見えなくなってしまふ。共感しなきゃいけないんだ。共感してないのにね。だから共感できないことが悪いわけじゃないわけで、違う人間だからわかんないことがあって当然じゃないですか。でもちょっとでもわかっていることが、ちょっとでもあったら向こうの人はすごく感じてくれますよね。この人ちょっとでもわかってくれた。それだけで、すごく大事なんだ。ていうことも一つなんかねロジャースの考え方の大事な点だと思いますね。全てがわからなきゃ共感じゃないみたいなこと思い出したらさ、人間やめなきゃいけない。お化けになるか、神様になるかさ、だから、やっぱりちょっとでもわかったら返してみると通じるみたいな。そっちの方が返って共感的になるんじゃないかなーって思ったり、そういうことを感じましたね。

④セッション終了後西岡の感想

院生の皆さんが実際にカウンセリングをされながら色々なことを感じられている事のお話しを聞くことができとても良かったです。

私自身も学び始めたM1 M2の頃を思い出しながら色々と初心に戻る事ができたように思いました。

自分が体験していること、感じていることは、どういう意味があるのだろうか？なぜそう感じるのか？

カウンセラーとしてそういう問いを積み重ねていくことがクライアントの理解に繋がっていくのだなと改めて感じました。

ひとつくりにカウンセラーといっても一人一人皆違います。その中で自分らしさを生かしたカウンセリングができればいいなと感じました。

また機会があれば是非皆さんの話を聞かせていただけたらと思います。

⑤松尾のセッション全体の感想

「今日は本当にありがとうございました。先週ですね、1週間間違えて先生がメールをしてこられて、「えっ来週だったよね」と思いながらも、そのおかげで早めに資料作りやどのようなカンファレンスにしたいのかなど、早めに先生に提案をさせていただこうと思えました。村山先生と3回くらいお話をし、今日のような場を作ってくださいました。正直こんなに集まると思っていなかったのは、はじめは大丈夫かなと思っていました。題名も「共感できない相手とどう向き合うのか」して、あとからなんでこんな題名にしたんだろうと思ってしまったりもしていました。今日このような場で、はじめに皆さんにも発言をしていただきます。ということもお伝えしていなかったにも関わらず、皆さんのご自身の経験から様々な角度で意見をお聞きすることができ、私もすごく勉強になりました。こうやって皆さんお話しして頂いたのも良かったです」

セッションを終え、自身で振り返ってみると、クライアントに共感しないと考えすぎている自分に気づいた。相手を理解したいという

一心での思いではあったが、わからないことはクライアントに確認をしていながら話を聴いていきたいと思った。そして、ケースの中で感じる違和感などを大切に、その違和感をまたクライアントの理解へつなげていきたいと思う。

そして、今回のようなカンファレンスの形を実施するまでに、担当教員の先生方と話し合いを事前に重ねた。その話し合いは、自身の困り事を丁寧に扱うための整理する時間になり、自身の思いに耳を傾ける時間となったと同時に、カンファレンスは事例提供者1人で成り立つものではなく、担当教員の先生や参加者全員で成り立つものだ実感した。そのため、担当の先生方との事前の話し合いは重要だと思った。

このような機会をいただき、より一層、自身の臨床経験を重ねていきたいとの思いとともに、参加して下さったみなさんに感謝の気持ちでいっぱいである。(松尾執筆)

V. 考察

新しい試みに関与させていただくことでカンファレンスについて改めて考えることとなった。まずは事例提供者の方がカンファレンスに出してよかったと思えることが大切である。そして参加された方にもいい学びとなるような場にしたいと考えていた。村山先生の丁寧な準備打ち合わせを拝見した。協働するには一つ一つ丁寧に確認しながら行うこと、今回のような新しい試みの場合には特にそれが要だと思った。構造についても参加者が事例提供者の話をきいて突然話し出すのではなく、少し自分の考えをまとめる時間を設け、紙に書きだし、その後発表し、またそれをホワイトボードに可視化するなどは、その場にいるすべての人の安全感を保つためによく考えられていると思った。

司会・ファシリテーションの際に気を付けたことは、事例提供者が感じていることや気になっていることを発言しやすい場の空気感を醸成すること。自分も含めてその場にいる参加者一人一人の感じもまた大切にしたいということ

である。自然とPCAグループをしているときのような感覚であった。積極的に発言しない人がいてもよく、発言の順番がきてもパスもあり。沢山お話ししたい人がいてもある程度許容しつつも時間は参加者全員に平等であることを意識しながら進めた。コロナ感染症対策で「密」にならないように、換気をしながら、距離をとりながら、マスクをしての対話であったので、聞き取りづらかったり、表情が読み取りづらいこともあったと思う。車いすでの参加、補聴器をつけての参加、若い方、社会人の経験のある方、外国にルーツのある自分、多様な人々が参加された。人と違うことによって手間をとったりよく理解してもらえなかったり面倒だと思われることが日常の生活では多々ある。反対に年恰好の近い大学院生が複数いると、似ているような人々だと一括りに見られることもあるだろう。しかしこのようなグループの場ではそれぞれの違いや似ている点をそのまま理解しあおうという空気感が生まれ、より豊かな気づきが生まれるように思う。日々の忙しさにかまけて前例を踏襲し思考停止になってしまいがちであるが、そもそもカンファレストは何のためにあるのかと考えさせられた貴重な体験であった。

(姜 執筆)

VI. 参考文献

- 村山正治・松村人志・桑野浩明・桑野裕子 (2011) 臨床心理士養成における有効な臨床カンファレンスの探索的研究—全国調査ならびにアクションリサーチによる継続的研究— 東亜大学大学院総合学術研究科 心理臨床研究—臨床・リサーチ・理論—, 11, 3-36.
- 村山正治・中田行重 (2012) 新しい事例検討法PCAGIP入門：パーソン・センタード・アプローチの視点から 創元社
- 仙頭 彩奈・深津典子 (2014) 心理臨床センタースタッフ研修におけるケースカンファレンスに関する一考察：従来のケースカンファレンスとPCAGIP法の比較を通して 明治学院大学心理学部附属研究所年報, 7, 53-62.
- 村上恵子・北田朋子・村山正治 (2015) 大学院ケースカンファレンスにおけるPCAGIP法の試み—事例の提供・プロセス・結果・意義の考察— 日本人間性心理学会第34回大会プログラム・発表論文集, 82-83.
- 杉浦崇仁・村上恵子・吉田由美・古野 薫・北田朋子・中山幸輝・吉持慕香・村山正治 (2020) 「PCAグループ」および「PCAGIP法」に関する文献リスト (2019) 東亜臨床心理学研究, 19, 123-132.
- 村山正治 (2020) 「なぜPCAGIPか」第39回大会教育・研修委員会企画シンポジウム「事例検討会を再検討する」ケースカンファレンス再考 心理臨床学研究, 38(5), 437-457. 2020, 12 日本心理臨床学会